

3) 北松海区

この海区は、前述した「魏志」の倭人伝に「朝鮮半島から対馬、壱岐を経て海を渡ってくると松浦につく、家が四千余戸もあるが、家はみんな山のせまった海のほとりにある。山は草木がうっそうとして茂っていて、すぐ前を歩いている人すら見えない。住民達は好んで魚やアワビをとって暮らしを立てている…」とあるように、古い歴史をもっている。平安時代の末、延久元年(1069年)、摂津渡辺庄から下向して今福に土着した源久が、その後この地を支配した松浦党の始祖で、正保2年(1645年)徳川家光の頃には、現在の北松海区に属する鷹島、福島、青島、度島、大島から平戸島、生月島、小値賀島、野崎島、田平、鹿町、佐世保と壱岐、川棚など(宇久島を除く)を所領として、明治2年(1869年)まで、平戸藩松浦氏が支配した海域である。

表3.1, 3.2よりみると北松海域はひき回し船びき網, ひき寄せ船びき網, 中・小型まき網, その他の刺網など4つの漁業が8海区の中でそれぞれ1位を占め, 2位にその他の敷網, 小型定置網, その他の釣, 採貝, 3位に小型底びき網, 大型定置網, はえ縄, 採草, 4位にイカ釣, その他の漁業など1位から4位までの総計が14漁業種もあり, 県下で最も漁業が盛んな海区といえる。

表3.6より, この海区で最も経営体数の多いものは, その他の釣が全体の24.2%, イカ釣19.0%, その他の刺網16.1%, 採貝10.9%, ひき回し, ひき寄せ, 底びきを合わせた船びき網類の総計で12.4%と, 7つの漁業種をあわせてやっと82.6%となり, 対馬や壱岐海区と異なって経営体数の均等化がみられる。

次いで漁獲量からみると, 総漁獲量67,548トンのうちカタクチイワシ, マアジ, サバを主とする中・小型まき網が50,855トン(総漁獲量の75.3%)と圧倒的に多く, サンマ, イカ類, マアジを主とする大・小を含む定置網が4,457トン(同6.6%), サザエ, イカ類, マダイを主とするその他の刺網が1,851トン(同2.7%)となり, これらの合計で全体の84.6%を占め, 経営体数の場合と逆の順序になっている。

この海区の特徴は, 経営体数で県下の上位を占める漁業が, 主要漁業種15種中, 14種を占める程多岐にわたっていることと, 経営体数は少ないが長年にわたる技術伝承の歴史を持つことから圧倒的に漁獲量が多い中・小型まき網漁業と定置網漁業が特徴漁業としてあげられる。

漁業種類が多岐にわたっている理由は, この海区は長崎県の最北部にあり, 北に福島, 鷹島, 青島, 飛鳥などの島嶼と九州本土とに囲まれて, 船びき網や小型底びき網の漁場となっている伊万里湾海域, 鷹島の西岸と大島, 度島, 平戸島と田平, 新里鹿などの九州本土とに囲まれた吾智網漁場海域, 大島, 度島, 平戸島, 生月島に囲まれて, 大きな湾形を形成し, トビウオ船びき網と定置網の漁場に適している海域, 平戸島東・西岸の定置網, 中・小型まき網, 吾智網などの漁場海域, 五島列島の最北端部に位置し, 一本釣, 採貝, 採草が盛んな宇久島, 小値賀島海域, 九州本土の田平, 鹿町, 小佐々, 佐世保の各地と, 平戸瀬戸をはさんで, 平戸島東岸とに囲まれた中・小型まき網漁場海域, また, 大島, 平戸島, 生月島の西側に面し, 沖合遠く玄海灘をへだてて対馬に対しては, 中・小型まき網漁場海域など, 各種漁業に適した漁場が他海区より多いことによるものと考えられる。

定置網漁業や中・小型まき網漁業の漁獲量が多い理由としては, 網規模の大きいこともあるが, 天明8年(1788年), 画家の司馬江漢が生月捕鯨を写生に来島した折, クロマグロ大敷網が生月で既に7ヶ統も操業されていたとの記述があり, この頃よりの定置網漁業の技術が今日まで引き継がれてきていることや, 中・小型まき網では, 歴史的には浅いものの, 明治22年(1889年)に千葉県の本松喜助が発明した改良揚繰網が明治38年(1905年)頃生月にもちこまれ, 壱部浦の大川鉄蔵が従来の八田網にかえて導入をはかり, 4~5年の苦勞のすえ, 明治42年(1909年)に成功をみて今日に至っていることなど, 長年の技術伝承の結果によるものと考えられる。

表3.6 平成7~10年の4年間の平均経営体数と対象魚種(北松海区)

漁業種類	年度					全体に占める%	4ヶ年平均の漁獲量	主な対象魚種(トン)	備考
	平成7年	平成8年	平成9年	平成10年	4ヶ年平均				
地びき網									
ひき回し船びき網	108	69	73	55	76	3.2	1,019トン(1.5%) トビウオ(994)		
ひき寄せ船びき網	154	155	154	162	156	6.5	イワシ船びき網 652トン(1.0%) 吾智網 1,948トン(2.9%) カタクチイワシ(617) マダイ(436) マアジ(19)	イワシ船びき網と吾智網を含む	
小型底びき網	72	65	63	58	65	2.7	601トン(1.0%) エビ類(123) イカ類(34)		
中・小型まき網	44	45	49	51	47	2.0	50,855トン(75.3%) マアジ(14,605) カタクチ(21,630) ウルメ(1,171) サバ(4,404)		

漁業種類	年度						4ヶ年平均 の漁獲量	主な対象魚種 (トン)	備 考
	平成7年	平成8年	平成9年	平成10年	4ヶ年平均	全体に占める%			
その他の刺網	397	392	396	352	384	16.1	1,851トン(2.7%) サザエ(134) イカ類(133) マダイ(95) カニ(42) マアジ(21)		
その他の敷網	23	21	19	21	21	1.0	318トン カタクチイワシ(146)		
大型定置網	4	5	5	4	5		1,706トン(2.5%) サンマ(464) イカ類(234) マアジ(119) ブリ類(100) トビウオ(71)		
小型定置網	106	102	101	94	101	4.2	2,751トン(4.1%) イカ類(593) サンマ(589) マアジ(219) ブリ類(154) トビウオ(67)		
は え 縄	107	99	93	88	97	4.1	402トン マダイ(31) ブリ類(5)		
イ カ 釣	496	481	466	376	455	19.0	1,369トン(2.0%) その他のイカ(953) スルメイカ(405)		
その他の釣	597	591	580	546	579	24.2	1,148トン(1.7%) ブリ類(162) マダイ(61) マアジ(59)		
採 貝	273	273	269	230	261	10.9	509トン サザエ(291) アワビ(207) ナマコ(12)		
採 草	49	47	49	29	44	1.8	1,137トン(1.7%) ヒジキ(934) ワカメ(203)		
その他の漁業	89	91	100	111	98	4.1	1,282トン(1.9%) ウニ(455) タコ(390) カニ(10) ナマコ(18)	かご漁業と磯どり	

経営体数 2,389 総漁獲量 67,548トン

4) 大村湾海区

大村湾は日本の西端、長崎本土のほぼ中央部に位置しており、昔より琴の海と呼ばれ、風光明媚な湾として親しまれていた。この湾は、日本三大急潮（最大10ノット以上）の一つである針尾瀬戸（長さ7km、最小巾200m、平均水深30m）と早岐瀬戸（長さ10km、最小巾20m、平均水深4m）の二つの狭窄した水路によって、母湾である佐世保湾とつながっている。地形的には、第三紀中葉以降の洪積世初期頃までの地殻運動、特に断層運動によって針尾瀬戸から西岸の琴海、これに続く南東の津水湾あたりまで少し深くなっている。海表面積は320km²、琵琶湖の半分位で、平均水深16m、潮位差70cmと閉鎖性の強い内湾型海湾である。

歴史的にこの湾全体は、天正15年（1587年）の豊臣秀吉の九州国わけの時より、戦国の小大名であった大村氏が所領として明治2年（1869年）まで支配していた。その間、内湾のため漁業的には余りみるものがなかったが、慶長末（1614～1615年）紀州熊野地方を武者修行中に捕鯨と出会い、その捕鯨技術を会得して帰国した波佐見の郷士中尾次郎衛門が、藩の援助のもとに大村湾を総基地として、西彼杵沿岸より五島、生月、壱岐周辺まで出漁し成功をおさめた。当時、鯨が一頭とれば七浦にぎわうとされ、その経済効果は多大なものがあつた、その功により深沢の姓を許され、その後深沢儀太夫と名のつたことから捕鯨業の藩経済への貢献度は高かった。

表3.1、3.2より大村湾海区は地びき網、その他の漁業、小型底びき網など3つの漁業が8海区の中でそれぞれ1位を占め、3位に小型定置網が占めている。

表3.7より、この海区で最も経営体数の多いものは小型底びき網で、全体の35.6%、その他の刺網19.1%、その他の釣16.7%、その他の漁業12.1%となり、これらの4漁業種で83.5%を占めている。

次いで漁獲量からみると、総漁獲量3,490トンのうち、ナマコ、エビを主とする小型底びき網が760トン（総漁獲量の21.8%）、経営体数は少ないが、カタクチイワシを主とする中・小型まき網が700トン（同20.1%）、マダイ、クロダイ、イボダイ、イカ類などを主に漁獲するその他の刺網が441トン（12.6%）、ウニ、ナマコ、タコ、カニ類などを主とするその他の漁業が368トン（同10.5%）、ヒジキ、ワカメ、モズクを対象とする採草が342トン（同9.8%）、経営体数は少ないが、カタクチイワシ、マアジを対象とする地びき網が304トン（同8.7%）で、これら6漁業種で2,915トン（同83.5%）となる。

ここで主漁獲種を整理すると、カタクチイワシ、ナマコ、エビ類、カニ類、クロダイ、イボダイ、イカ類の他、静かな海に生育するモズクなどがあげられる。特にカタクチイワシは地びき網と中・小型まき網をあわせて959トンで、総漁獲量の27.5%と卓越しており、小型底びき網とその他の漁業によるナマコが282トン、総漁獲量の8.1%で、カタクチイワシとナマコの2種類で35.6%を占めている。

これとあわせて、漁獲対象となっているエビ類、カニ類、クロダイ、モズクなどの特性や大村湾の形状からからみて、この海区の特徴は、閉鎖型の浅海内湾性生物の漁場であると考えられる。

表 3.7 平成7～10年の4年間の平均経営体数と対象魚種（大村湾海区）

年度 漁業種類	平成7年	平成8年	平成9年	平成10年	4ヶ年平均	全体に占める%	4ヶ年平均の漁獲量	主な対象魚種（トン）	備 考
地 び き 網	5	3	3	6	4		304トン(8.7%)	カタクチイワシ(259) マアジ(36)	
ひき回し船びき網	2	1	1	0	1		4トン	エソ	
ひき寄せ船びき網	3	3	3	3	3				
小型底びき網	397	412	406	445	415	35.6	760トン(21.8%)	ナマコ(226) エビ類(122) 貝類(44) イカ類(37) タコ(13)	
中・小型まき網	7	7	7	7	7		700トン(20.1%)	カタクチイワシ	
その他の刺網	251	263	237	142	223	19.1	441トン(12.6%)	マダイ(29) クロダイ(22) イカ類(34) イボダイ(25) ニベ・グチ(30) カニ類(24)	
その他の敷網	1	1	2	0	1				
大型定置網									
小型定置網	69	65	69	66	67	5.8	106トン(3.0%)	イカ類(19)	
は え 縄	48	46	46	37	44	3.8	125トン(3.6%)	エイ類(28) マダイ(14) クロダイ(15)	
イ カ 釣	7	8	10	8	8	1.0	49トン(1.4%)		
その他の釣	206	207	182	183	195	16.7	177トン(5.1%)	マアジ(27) タコ(26) イサキ(21) マダイ(21) クロダイ(12)	
採 貝	40	32	31	57	40	3.4	114トン(3.3%)	サザエ(29)	
採 草	21	16	17	8	16	1.4	342トン(9.8%)	ヒジキ(107) ワカメ(95) モズク(68)	
その他の漁業	125	132	123	185	141	12.1	368トン(10.5%)	カニ(45) タコ(48) ウニ(65) ナマコ(56)	かご漁業 磯どり

経営体数 1,165 総漁獲量 3,490トン

5) 西 彼 海 区

西彼海区は、明治2年（1869年）まで大村藩が支配した崎戸島、大島を含む西彼杵半島の西側にあたる大瀬戸、式見、三重などの外海海域と、同海域に面して長崎半島の西側に位置する旧天領の長崎、鍋島藩の飛地であった深堀、旧天領の高浜、野母など、幕府ならびに各藩がそれぞれに支配していた海域で、対馬暖流の直接の影響は受けていない。

表3.1, 3.2より、西彼海区は採草が8海区中1位で、3位にその他の釣(主としてタチウオ、ブリ類)、4位にその他の漁業(主としてタコ)と余り漁業が盛んな海区とはいえない。

表3.8より、海区で最も経営体数の多いのはその他の釣で全体の46.5%、その他の刺網16.8%、採草10.0%、その他の漁業8.1%となり、これらの4漁業種で81.4%を占めている。

次いで漁獲量からみると、総漁獲量21,114トンのうち、経営体数ではわずかに1%に過ぎない中・小型まき網が16,827トン(総漁獲量の79.7%)と80%近くをあげており、同様にイカ釣が、経営体数は全体の2.5%なのに漁獲量では1,692トン(同8.0%)と、この2つの漁業で87.7%を占めている。

このことから、この海区の特徴的な漁業として中・小型まき網漁業とイカ釣漁業があげられる。この海区のなかで旧大村藩に属する瀬戸、蛸の浦、崎戸の漁民は、平家の落人の末裔と伝えられる。元来、船を住居にして各地を漁してまわる家船であったが、文明6年(1474年)、大村氏と島原の有馬氏との合戦の折、大村藩主を助けた功により領海漁業権を与えられ、鉾つき、かづら縄などの漁業を営んでいたが、資本的に近代漁業に育たなかった。また、西彼杵半島一帯も、農、漁業共に生産性に乏しく、宝暦13年(1763年)には、五島藩が年貢負担者としての浜百姓の減少に対応するため、この半島の住民を移住させ、居付き百姓として優遇したとあるところからみても明らかである。

これに反し長崎半島の野母では、時代は明らかでないものの、紀州熊野から漁民が漂着してから漁業が盛んになり、元禄、宝永(1688～1701年)には、カツオ釣、イワシ網が操業され、運上銀も納めていた。享保末年(1716～1801年)には、カツオ漁業を中心に各種漁業が発展し、文政4年(1821年)には、西国筋の流通の拠点であった尾道の記録に、肥前では野母、協岬、樺島の名があり、生產品として干イワシ、カツオ節の名があがっている。

享保10年(1725年)頃、世の中が平和になってくると農業が奨励され、稲作、特産品の蜜柑、棉作、藍などの肥料として、イワシは干イワシ、イワシ粕に加工され、全国的に大いに利用された。それに伴って、イワシをとるための地びき網、四張網、八田網が盛んに行われたが、明治初期(1870年)からは八田網に袖網をつけた縫切網、明治37年

(1904年)頃からは巾着網、大正初期(1913年)頃からは揚繰網へと、漁具が発達進歩し、同時に、肥料用の干イワシから食用としての煮干、目刺などの製造へ移り今日に至っている。

カツオ釣については、五島をはじめ野母でも盛んであったが、明治43年(1910年)頃からカツオの群の回遊路が沖合に変わってくるにつれ、野母を含めたカツオ漁業は衰微し、大正初期(1913年)頃には長崎県のカツオ釣漁業は消滅した。しかし、カツオ釣が盛んであった漁村はカツオばかりでなく他の魚も釣っており、特にブリ、サバなどの一本釣はカツオ釣漁法が直接影響して発展してきたといわれる。

これらの歴史的な背景にもとづいて、この海区では中・小型まき網漁業と共にイカ釣漁業をはじめとする釣漁業が特徴的漁業になったものと考えられる。

表3.8 平成7～10年の4年間の平均経営体数と対象魚種(西彼海区)

漁業種類	年度	平成7年	平成8年	平成9年	平成10年	4ヶ年平均	全体に占める%	4ヶ年平均の漁獲量	主な対象魚種(トン)	備考
地びき網		1	1	0	0	1				
ひき回し船びき網										
ひき寄せ船びき網										
小型底びき網										
中・小型まき網		11	10	9	7	9	1.0	16,827トン(79.7%)	マアジ(5,880) カタクチイワシ(3,500) マイワシ(2,992 サバ(2,014)	
その他の刺網		214	214	210	176	204	16.8	392トン(1.9%)	イセエビ(39) ブリ、カレイ、マダイ	
その他の敷網		1	0	0	0	0		17トン	カタクチイワシ	
大型定置網										
小型定置網		27	28	28	27	28	2.3	455トン(2.2%)	タチウオ(101) ブリ類(41) イカ類(48) マアジ(35)	
はえ縄		97	99	99	83	95	7.8	225トン(1.1%)	アマダイ(22) キダイ(14) ハモ(13) フグ類(52)	
イカ釣		34	29	30	26	30	2.5	1,692トン(8.0%)	その他のイカ(1,575)	
その他の釣		579	619	591	461	563	46.5	660トン(3.1%)	タチウオ(119) ブリ類(87) マアジ(48) エソ(17)	ひき縄83トン タチウオ(79トン)
採貝		56	56	59	75	62	5.1	55トン		
採草		139	139	120	85	121	10.0	262トン(1.2%)	ヒジキ、ワカメ	
その他の漁業		97	99	98	99	98	8.1	529トン(2.5%)	タコ(219) ウニ(140) フグ(136) コウイカ(15)	

経営体数 1,211 総漁獲量 21,114トン

6) 橘湾海区

この海区は島原、長崎両半島と、北高来郡の火山海岸とにかこまれた湾で、湾北部の千々石は典型的な断層地形を呈しており、湾中央部は比較的平らな海底で、平均水深は36mである。対馬暖流の直接の影響は受けていないが、北上する外洋水と、南下する栄養豊富な有明沿岸水とが混じりあって、プランクトンの発生をうながし、対岸の天草にも囲まれた静穏な海域のため好漁場となっている。

橘湾周辺地区の殆どは、古くは有馬氏が支配し、寛文9年(1669年)より途中若干の交替時期はあったが、その後深溝松平氏が明治2年(1869年)まで支配した。

表3.1, 3.2より、橘湾海区は小型底びき網と、中・小型まき網が8海区の中でそれぞれ2位を占めている。

表3.9より、この海区で主も経営体数の多いものは小型底びき網で、全体の33.0%、その他の釣25.3%、その他の刺網14.9%、はえ縄9.8%となり、これら4漁業種で83.0%となる。次いで漁獲量からみると、総漁獲量17,394トンのうち、経営体数では僅か1.3%にすぎない中・小型まき網が13,005トン(総漁獲量の74.8%)、小型底びき網が1,202トン(同6.9%)で、これら2つで総漁獲量の81.7%を占めることから、この海区を特徴づける漁業は、中・小型まき網漁業と小型底びき網漁業があげられる。

小型底びき網は、延宝年間(1673~1681年)、熊本県宇土地方で始められ、当初は地漕網という、ごく沿岸で操業する小規模なものであったが、天明4年(1784年)頃には、風力や潮流などを動力として使う手繰網にかわり、天草を

経て橘湾の茂木、江の浦に帆打瀬として伝わったものと考えられる。明治34～35年（1901～1902年）頃には、距岸4～35km沖でクルマエビ、小ダイ、グチなどを漁獲したと記録にあるが、大正12年（1923年）に石油発動機が出現するまでは、この海域ではそう盛んな漁業ではなかったと思われる。しかし、湾中央部が比較的平らで、底質も砂泥であることなどから底びき網漁場に適しており、現在の経営体数の多さにつながっているものと考えられる。

中・小型まき網漁業は、昔よりカタクチイワシ資源が豊富なことから、西彼海区と同時期に、地びき網、四張網、八田網、縫切網と、漁具の改良を重ね、江の浦は明治初期から大正末（1868～1926年）まで県下でも優秀なまき網基地であった。明治初～中期（1868～1890年）頃は縫切網の中心地としての有喜を核とする橘湾一帯では、熊本産の麻糸を網地に使用する縫切網を家内工業で製造していた。網を設計する網師もいて、改良工夫された網は「有喜網」と呼ばれ、明治13年（1881年）には五島奈良尾に導入された程であったが、漁具的には幼稚で、漁獲も小羽イワシに限られていた。

イワシ網漁業における沖合操業の必要性は、明治10年から同20年（1877～1887年）にかけて、橘湾などの縫切網漁村のみならず全国のイワシ網漁場で待望されていた。農商務省水産局では、これに応えるべく新漁法の開発に力を入れ、「アメリカ式巾着網」の技術を紹介すると共に、導入をはかっていたが、これに併行して、明治22年（1889年）に千葉で考案された和洋折衷型の「改良揚繰網」が出現すると、各地に驚くべき早さで伝わった。

長崎県では、明治32年（1899年）、「地方費」によって新式網をつくり、南高来郡漁業組合に貸与して試験操業を行い、その後、新網普及事業として、「イワシ巾着網試験」と称し事業を行っていたが、実用化の段階で「双手和船巾着網」と名前を変えていることから、「改良揚繰網」の流れをくむものと思われる。この網は縫切網の2～3倍の漁獲があり、魚体も大きいものが獲れたのでまたたく間に普及をみた。明治40年頃（1907年）には、有喜・江の浦巾着網船団が五島灘に出漁するようになり、同じ年、長崎県では南高来・西彼の業者による韓国海域出漁組合の結成をはかり、有喜、江の浦、南串山が中心となって韓国巨済島を基地にサバ漁を行っている。

これらの歴史的事実よりみて、その技術が今日まで伝承され、海区の特徴の一つにあげられる漁業になったものと考えられる。

表 3.9 平成7～10年の4年間の平均経営体数と対象魚種（橘湾海区）

年度 漁業種類	平成7年	平成8年	平成9年	平成10年	4ヶ年平均	全体に占める%	4ヶ年平均の漁獲量	主な対象魚種（トン）	備 考
地 び き 網									
ひき回し船びき網									
ひき寄せ船びき網	2	2	3	5	3		143トン(1.0%)	カタクチイワシ(143)	
小型底びき網	318	306	308	293	306	33.0	1,202トン(6.9%)	エビ(260) エソ(108) カニ(37) マダイ(7)	
中・小型まき網	10	14	11	11	12	1.3	13,005トン(74.8%)	カタクチイワシ(6117) マイワシ(2,796) マアジ(2,336) コノシロ(92)	
その他の刺網	141	158	147	106	138	14.9	880トン(5.1%)	マカジキ(125) シイラ(81) クロカワ(62) マダイ(21) プリ(15)	大目流網ほか
その他の敷網	6	2	6	3	4		276トン(1.6%)	カタクチイワシ(97)	
大型定置網									
小型定置網	30	30	30	32	31	3.3	334トン(1.9%)	タチウオ(51) マアジ(51) コノシロ(30) プリ類(31) イカ類(52) マダイ(15)	
は え 縄	91	94	92	88	91	9.8	622トン(3.6%)	タチウオ(253) キダイ(34) マダイ(32)	ひき縄203トン(1.2%) タチウオ(203トン)
イ カ 釣	3	3	5	3	4		9トン		
その他の釣	249	244	259	189	235	25.3	399トン(2.3%)	プリ類(106) タチウオ(96) マダイ(39) マアジ(31)	
採 貝	52	59	61	33	51	5.5	38トン	アワビ サザエ	
採 草	5	5	4	1	4		76トン	ワカメ ヒジキ	
その他の漁業	54	45	37	60	49	5.3	207トン(1.2%)	タコ(129) ウニ(34) イカ(14)	つば漁業

経営体数 928 総漁獲量 17,394トン